さいたま市立桜木中学校　学校だより　　第　７　号　令和５年１１月１日　発行

さくらぎ

〒330-0854　さいたま市大宮区桜木町４－２１９
ＴＥＬ　０４８－６４１－０４５９
ＦＡＸ　０４８－６４５－４５８４
E-mail　sakuragi-j@saitama-city.ed.jp

学校教育目標「溢れる英知　輝く笑顔」～学習いっぱい　優しさいっぱい　元気いっぱい～

読書週間に思う

校　長　　清水　一司

先日、千葉県の佐原（香取市）へ行きました。霞ヶ浦の近く、小野川沿いに作られたこの町は、江戸時代に実測による日本地図を完成させた伊能忠敬（いのうただたか）が暮らしていた町としても知られています。街の一画に残る忠敬の旧宅には、測量器具のレプリカが展示してあり、忠敬の偉業を偲ぶことができました。

忠敬についてさらに知りたくなり、本校の図書室で忠敬に関する本を手に取りました。この本によれば、忠敬は佐原で酒造りを中心に、水運をふくめて商売で成功を収めていたとなっています。確かに、忠敬の旧宅はその名残と思われる立派な作りをしていて、かなりの財を成していたと思われます。

「わしは５１歳になったばかりだ。」家業を子に譲り、２０歳年下の高橋至時（よしとき）から天文学を学んだ後、忠敬は日本全国の測量の旅に出ます。当時としてはかなり高齢で命がけの旅だったと思いますが、忠敬の向学心と情熱たるや「すごい」の一言に尽きます。

さて、１０月２７日から１１月９日までは読書週間です。本校の図書室には幅広い分野の良書が豊富に揃っています。是非、この機会に生徒たちにもよい本に出会ってもらいたいと思います。ここで、ドイツの哲学者であるショウペンハウエルが読書について興味深い言葉を残しているので紹介します。

> 読書は、他人にものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的にたどるにすぎない。習字の練習をする生徒が、先生の鉛筆書きの線をペンでたどるようなものである。だから読書の際には、ものを考える苦労はほとんどない。自分で思索する仕事をやめて読書に移る時、ほっとした気持ちになるのも、そのためである。だが読書にいそしむ限り、実は我々の頭は他人の思想の運動場にすぎない。

ここだけ切り取ると「本を読む行為は単に他人の考えをなぞっているだけになる。」と読み取れます。しかしショウペンハウエルは「本を読むことだけに満足することなく、自分で解釈し、考えることが必要である。」といった趣旨の言葉を続けています。本は読むだけだと単なる物知りに終わってしまう、読んだ後に考える時間が必要であるということでしょう。

「後世の役に立つような、しっかりとした仕事がしたい。」とも語っていた忠敬。当時の忠敬の年齢をとっくに超えている今の私に、忠敬のような高邁な志があるのかと自省しています。今更ながら、読書によって私の頭が単なる忠敬の思想の運動場にならないように、自身の生き方、考え方を見つめ直そうと思っています。

（参考　「なんのために学ぶのか」池上　彰　著　ＳＢ新書）